

# 山形昭の体育科（第3学年）研究計画

## 1 本研究の位置付け

体育科学学習指導要領の目標には、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」と明記され、生涯体育の重要性が述べられている。運動に親しむ資質や能力とは、運動への関心・意欲、仲間とのかかわりはもちろん、各種の運動の楽しさや喜びを味わえるよう自ら考えたり工夫したりする力や運動の技能を身に付けることを指している。また、資質や能力を育てるには、運動の課題を解決するなどの学習が重要であるとされている。これらのことから、私は、運動の楽しさや喜びを味わうためには、技能を身に付けることこそが大切だととらえ、課題を解決するなどの学習をとおして、技能を身に付けるために自ら考えたり工夫したりする力こそが、体育科で求める資質や能力の一つであると考える。

昨年度は、第2学年の体づくり運動「多様な動きをつくる運動遊び」において、学習課題に沿った動きを身に付けさせるために、まずは、自分と友達の体や用具の動かし方に着目させることで、できない原因を自覚させようとした。その後、「できない原因を克服できる体や用具の動かし方（以下、動きのこつ）」を見いだし運動させることで、動きを身に付けさせることをねらった授業実践を積んできた。授業実践からは、動きを身に付けることはできたが、動きのこつを見いだしていたとは言い難い。なぜなら、自分の体や用具の動かし方に着目せず、何度も運動を試す中で動きを身に付けた姿があったからである。動きのこつを自覚しないままに動きを身に付けたとしても、子どもは、どのように動きを身に付けたのかが分からないため、他の運動の課題と出会ったときに動きや技能を身に付けられないこともありうる。自分だけでは動きや技能を身に付けられないときに、友達や手本となる人の体や用具の動かし方を参考にして動きのこつを見いだす学習は意義がある。

また、昨年度からの反省点として、できない原因を自覚させることに弱さが見られた。昨年度は、できない原因を自覚させるために「動きのカルテ」を記述させた。「動きのカルテ」とは、自分の体や用具の動かし方を見直すための学習カードのことである。「動きのカルテ」に提示された体や用具の動かし方を自分の感覚や友達の評価によって判断させて、自分の体や用具の動かし方に着目させ、できない原因を自覚させようとした。しかし、自分や友達の評価が曖昧になったり正しい判断ができなかったりしたために、できない原因を自覚できなかったのである。

そこで、今年度は、第3学年における「多様な動きをつくる運動」を研究領域とし、できない原因を自覚させるために、タブレット端末を使用させる。自分の体や用具の動かし方を可視化させながら、「動きのカルテ」で示された観点を基に自分の体や用具の動かし方に着目させることで、できない原因をしっかりと判断させる。その後、自分の体や用具の動かし方と友達の体や用具の動かし方を比較させ、そこから見いだした動きのこつを試させる。その際にもこつを試している自分の体や用具の動かし方をタブレット端末で撮影させ、評価させる。「動きのこつを選ぶ→試す」を繰り返させることで、動きのこつを見いだし、動きを身に付けさせる。このように、できない原因を克服するために、友達の体や用具の動かし方を基にしながら考えたり工夫したりする学習をとおして、**動きのこつを見いだし、動きを身に付ける子ども**を目指す。

友達の体や用具の動かし方を基に、動きのこつを見いだし動きを身に付けた子どもは、他の運動領域においても、動きを身に付けられなかった自分と動きのこつとを関係付けて、動きを身に付けた自分をとらえることができるようになる。それが、生涯体育につながるのである。

## 2 主張する働き掛け

体のバランスをとる運動、体を移動する運動、用具を操作する運動、力試しの運動の4つの運動の中から1つの動きを取り上げ、子どもが運動意欲を高めるような、簡単な挑戦の場を設定し、運動させる。次に、別の1つの動きを取り上げて、簡単な挑戦の場を設定し、運動させる。最後に、「○○しながら△△しよう」といった、最初にやった動きと次にやった動きの2つの動きを組み合わせた挑戦の場を設定し、運動させる。すると子どもは、もっと達成しにくい挑戦の場に取り組みたいと考える。そこで、次のように働き掛ける。

### 働き掛け1

**工夫の観点を示し、難易度を上げた挑戦の場で運動させる。**

問いをもたせるための働き掛けである。もっと達成しにくい挑戦の場で運動したいと考えている子どもに、工夫の観点を示し、必要な場や用具、条件を揃える。子どもは、工夫の観点を基に様々な挑戦の場を設定しながら、運動に取り組む。常に難易度を上げる挑戦の場を設定させるために、やがて自分だけでは達成できない挑戦の場に到達する。そして、「工夫の観点を基に変えた新たな挑戦の場でも、達成できるようになりたい」と考える。このように、新たな挑戦の場を設定し、その挑戦の場を達成したいと意欲を高めている状態を問いをもった姿とする。問いをもった子どもに、次のように働き掛ける。

### 働き掛け2

**「動きのカルテ」を提示し、タブレット端末で撮影させながら運動させる。**

動きのこつを見いだすための視点を与え、自分の体や用具の動かし方に着目させるための働き掛けである。「挑戦の場を達成できるようになりたい」と考えている子どもに、「どうしたら挑戦の

場を達成することができるでしょうか」と学習課題を設定し、「動きのカルテ」を提示する。「動きのカルテ」には、「どこをどのように動かしているか」という、体の部位と動きのこつになり得る体や用具の動かし方を観点として示しておく。そして、その観点を運動しながら確かめさせる。その際、自分の体や用具の動かし方を明確に判断できるように、ペアに1台ずつタブレット端末を与え、互いの動きを動画で撮影させる。すると子どもは、「動きのカルテ」で示された視点を基にタブレット端末で撮影した自分の体や用具の動かし方を確認しながら、「自分は〇〇を△△のように動かしている」と、**自分の体や用具の動かし方（既有事項）**に着目する。

自分の体や用具の動かし方に着目した子どもに、拡大した「動きのカルテ」を提示し、自分の「動きのカルテ」で選んだ体や用具の動かし方と同じところにシールを貼らせる。また、「動きのカルテ」に示された観点以外の動かし方をした場合は、付箋にその旨を記入させ、拡大した「動きのカルテ」に貼らせる（以下、「みんなのカルテ」）。

#### 働き掛け3

**「自分の動きのカルテ」と「みんなのカルテ」との共通点や相違点、動かし方の程度を問う。**

「動きのカルテ」から自分が選択した体や用具の動かし方と他者が選択した体や用具の動かし方との比較により、動きのこつを見いだす視点の違いに気付かせ、できない原因を自覚させ、運動の見直しをもたせるための働き掛けである。「体のこの部位や用具をこう動かすと、うまくできるようになるのではないかと考えている子どもに、「みんなのカルテ」を提示し、「自分の動きのカルテ」との共通点や相違点を問う。子どもは、**比較するすべ**を用いて、**自分の体や用具の動かし方（既有事項）**と友達の体や用具の動かし方（情報）とを比べる。そして、相違点に挑戦の場を達成できない原因があるのではないかと気付き、「友達の体や用具の動かし方を自分に取り入れれば、挑戦の場を達成できるのではないかと友達の体や用具の動かし方をまねしてみよう」と考える。体や用具の動かし方を発表した子どもに、「どれくらい動かしただのですか」などと、体や用具の動かし方の程度を問い返す。単に友達の体や用具の動かし方と同じようにすれば、動きが身に付くとは限らない。問い返すことで、友達の体や用具の動かし方を基に、「〇〇さんは△△だけ動かしただけど、僕は、□□くらいがちょうどよい」というような動きのこつを見いだしやすくしておく。

ここでは、仮説をもった状態なので、次の働き掛けで実際に運動させて、仮説を検証させる。

#### 働き掛け4

**友達の体や用具の動かし方をタブレット端末で撮影させながら試させる。**

できない原因を克服するための体や用具の動かし方を試すことで、動きのこつを見いださせ、動きを身に付けさせるための働き掛けである。「あの体や用具の動かし方をまねしてみよう」と考えた子どもに、自分が試している友達の体や用具の動かし方をタブレット端末で撮影させながら、自分の運動感覚や撮影している友達の評価により、動きのこつとなり得るかを判断させる。1つの動きのこつを試す時点で、自分で設定した挑戦の場を達成できる子どももいれば、できない子どももいる。できない場合には別の体や用具の動かし方を「みんなのカルテ」から選んだり、友達から教わったりしながら試させて、再度評価させる。子どもからは、「できない原因を克服できそうな体や用具の動かし方を選ぶ→何度も試す」という姿や「できない原因を克服できそうな体や用具の動かし方を選ぶ→試すがうまくいかない→選び直す」という姿が見られ、運動を繰り返す。このときの子どもは、**比較するすべ**を用いて、**自分の体や用具の動かし方（既有事項）**と友達の体や用具の動かし方（情報）を試した自分の体や用具の動かし方とを比較する。運動をとおして仮説を検証し、挑戦の場を達成するための動きのこつを見だし、挑戦の場を達成する（動きを身に付ける）ことができるようになる。これが、**動きのこつを見だして、動きを身に付ける子ども**である。

動きのこつを見だして動きを身に付けた子どもは、**関係付けるすべ**を用いて、「このこつはうまくいかないが、このこつはうまくいく」というように、動きを身に付けられなかった自分と動きのこつとを関係付けて、動きを身に付けた自分をとらえる。その姿を表出させるために、学習課題に立ち返らせ、「どうして挑戦の場を達成することができたのか」を問い、ワークシートに考えを記述させる。

### 3 検証

#### (1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定した「考えるすべ」を使って、課題解決に必要な情報と既有事項とを関係付けることができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、学びをつなぐ力を高めた姿になったか。

#### (2) 検証の方法

- ① 働き掛け3において、比較するすべを用いて、友達の体や用具の動かし方と自分の体や用具の動かし方とをつなぐことができたかを、ワークシートの記述や子どもの様子により判断する。
- ② 働き掛け4において、動きのこつを見だして、動きを身に付けることができたかをワークシートの記述や実際の子ども様子により判断する。

### 4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業(7月) 「基本的な動きを組み合わせる運動(バランスをとりながら移動するなどの動き)」(4時間)
- (2) 中間検討会(9月) 「基本的な動きを組み合わせる運動(力試しの運動をしながら移動するなどの動き)」(4時間)
- (3) 初等教育研究会(2月) 「基本的な動きを組み合わせる運動(用具を操作しながら移動するなどの動き)」(4時間)